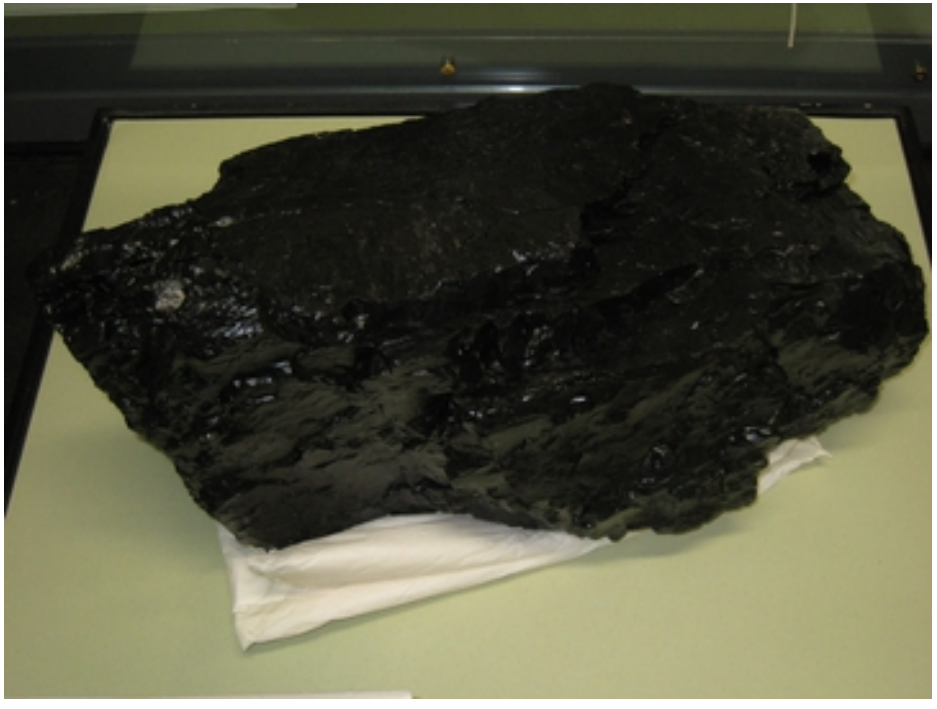
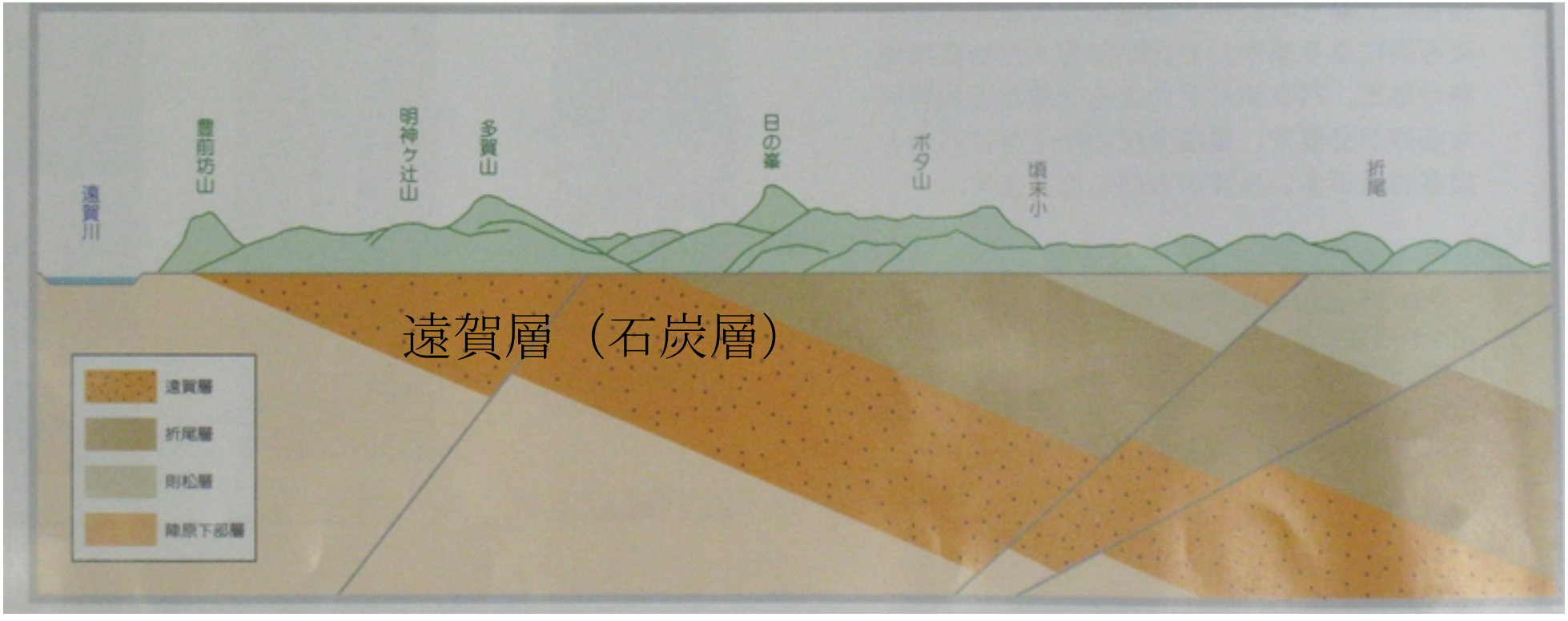
水巻の炭鉱史～その光と影～

2017 年 8 月 29 日　水巻町歴史資料館　大坪　剛



江戸時代は現在の石炭（せきたん）のことを焚石（たきいし）といい、
焚石を燃やしたものを石がら・石炭（いしずみ）と呼んだ

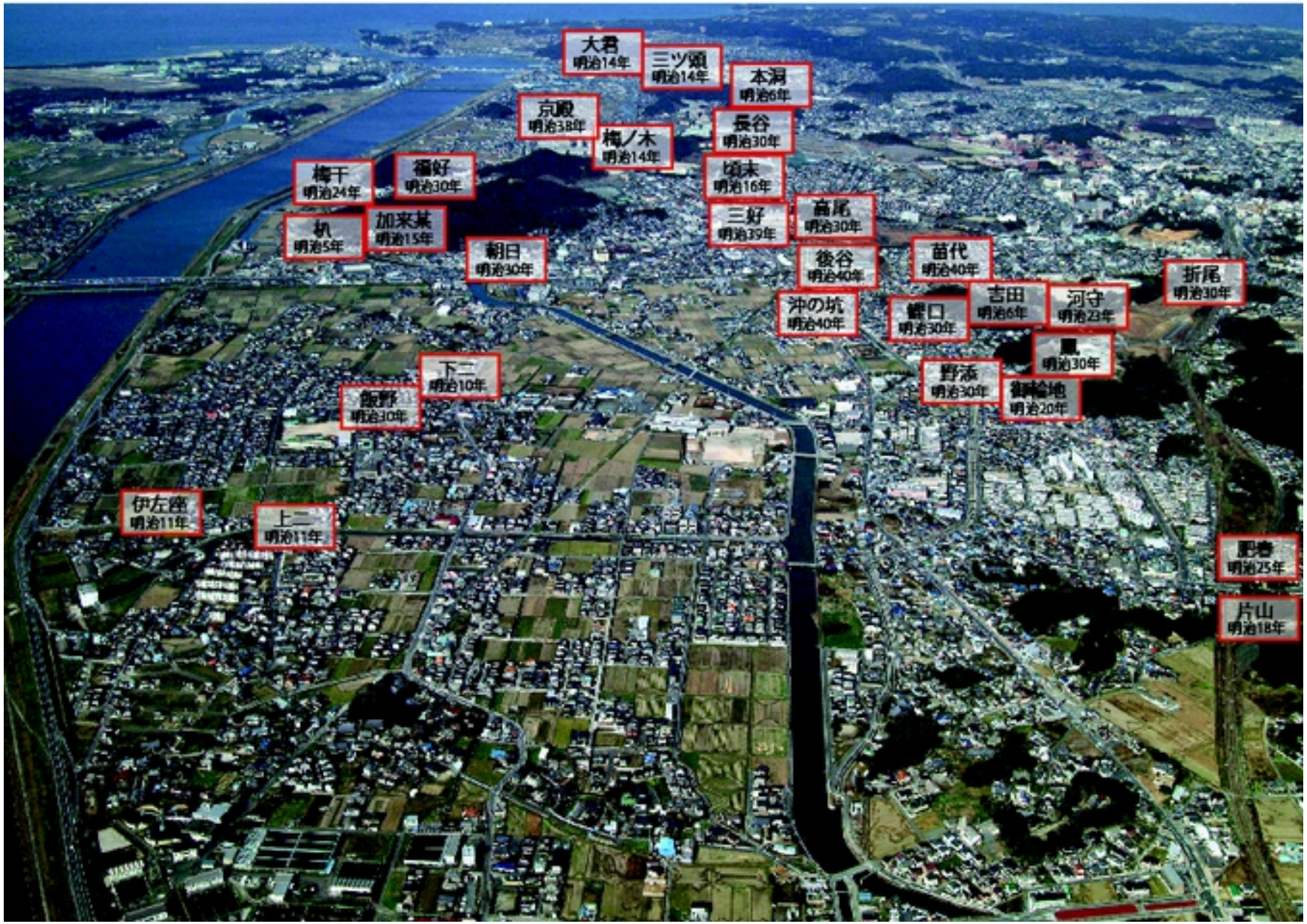
炭「鉱」
⇒ 一般的な呼称
炭「坑」
⇒ 坑口など
炭「礦」「砿」
⇒ 会社名、固有名詞



水巻周辺の地層（西側から東側に傾斜している）
石炭は遠賀層に含まれていて、3,500 万年前のもの

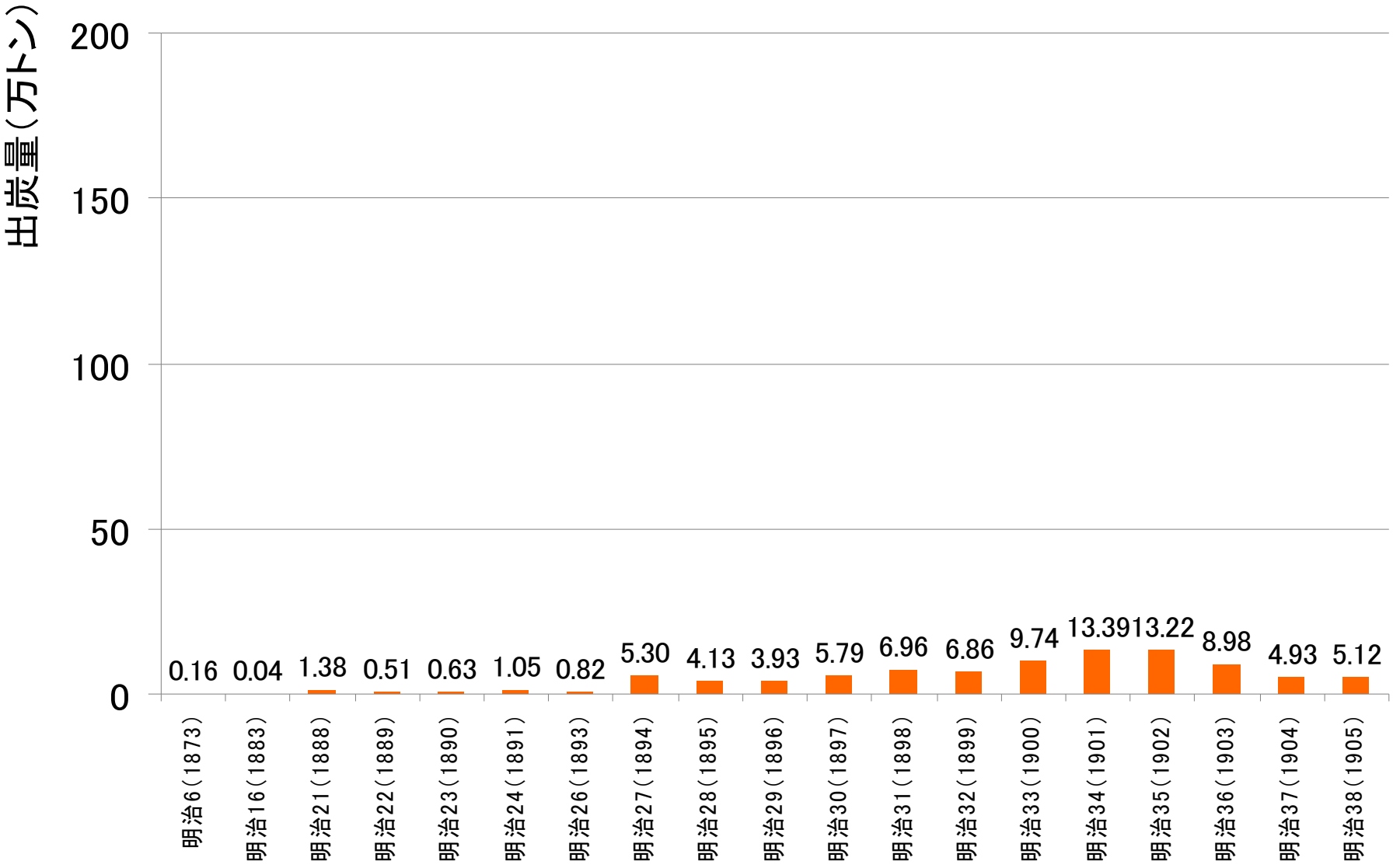
1. 江戸～明治時代の炭鉱

- 堀川開削工事（1751～62）で焚石発見
- 漁船のかがり火、製塩、鍛冶の燃料として利用
  その後一般の燃料として普及、藩の統制下に
- 寛政7（1797）古賀村、吉田村に焚石丁場
- 文化8（1825）えぶり村、古賀村に焚石丁場
- 嘉永2（1849）頃末村で焚石丁場落盤事故
- 嘉永5（1852）えぶり村王子神社棟札石炭採掘の記事
- 明治期、炭鉱は国の所有となり、申請すれば石炭を採掘できるようになる
  吉田、えぶり、下二、二、伊左座、古賀、頃末村に小炭坑
- 明治15年（1882）1万坪（33,000平方メートル）未満の小規模な炭坑は出願できなくなる



明治期の炭坑分布（「わたしたちのまち水巻」「水巻町民俗調査」付図を一部改編）

明治時代炭坑の出炭量

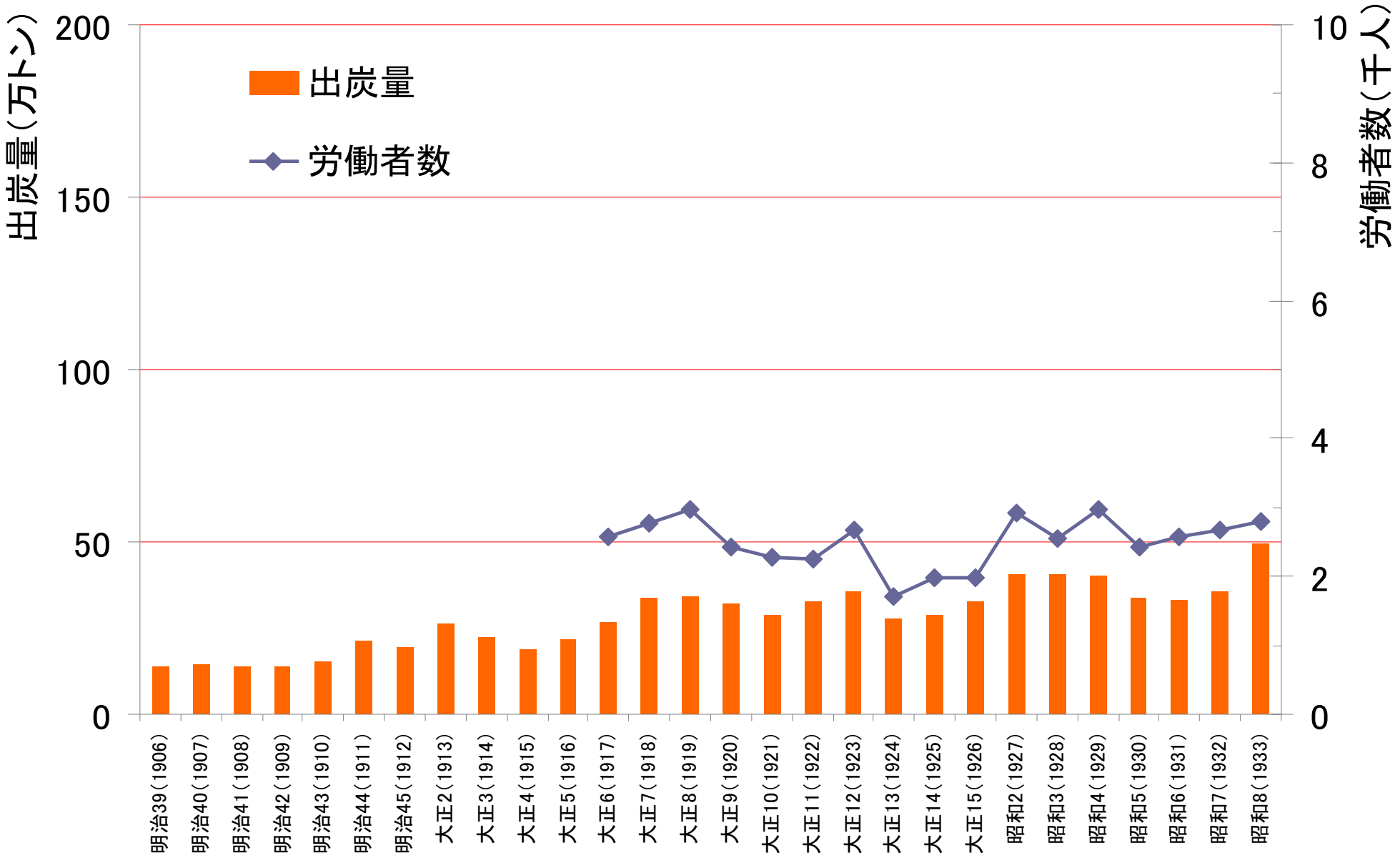

出炭量（万トン）
200
150
100
50
0
0.16
0.04
1.38
0.51
0.63
1.05
0.82
5.30
4.13
3.93
5.79
6.96
6.86
9.74
13.39
13.22
8.98
4.93
5.12
明治6（1873）
明治16（1883）
明治21（1888）
明治22（1889）
明治23（1890）
明治24（1891）
明治26（1893）
明治27（1894）
明治28（1895）
明治29（1896）
明治30（1897）
明治31（1898）
明治32（1899）
明治33（1900）
明治34（1901）
明治35（1902）
明治36（1903）
明治37（1904）
明治38（1905）

杁山荘付近にあった焚石丁場（炭坑）想像図
「わたしたちのまち水巻」より

2. 三好炭坑時代（1906～34）

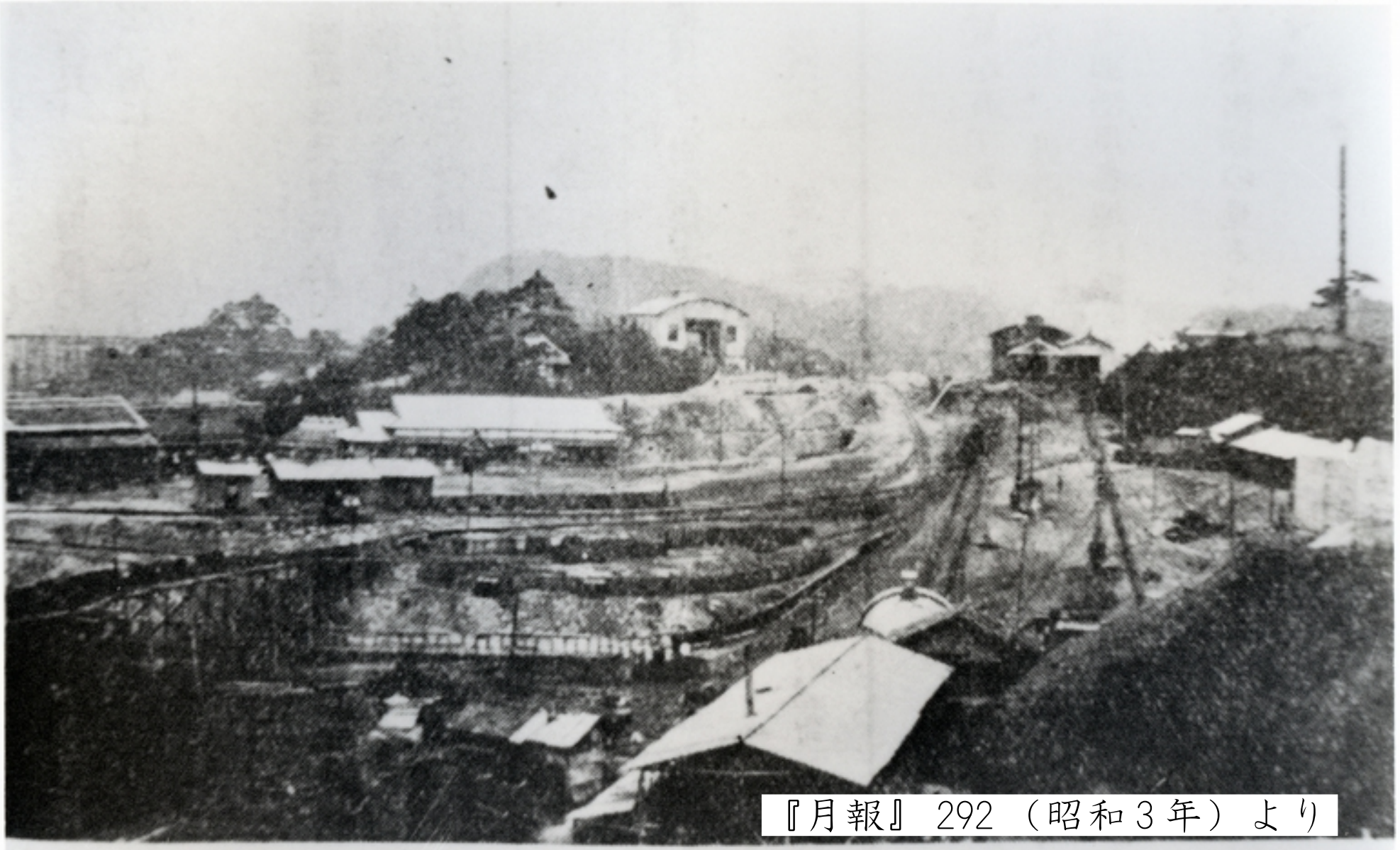
- 遠賀郡浅川村三ツ頭出身
- 鯰田炭坑（飯塚）で修行
- 水巻の頃末炭坑を買収、坑内排水運搬の機械化推進。鉱区を拡大し三好鉱業とする。筑豊御三家（麻生太吉、安川敬一郎、貝島太助）に次ぐ有力経営者となる。
- 寺社への寄付、学校の設立などの社会貢献活動
- 「高松キナコ」暴力が支配する圧制ヤマとして恐れられる
- 労働者には朝鮮半島からの人々や女性、未成年者もいた
- 昭和８年（1933）子どもや女子の坑内労働が禁止となる

三好炭坑時代の出炭量と労働者数



高尾坑（大正７年）「筑豊石炭礦業組合月報」より

三好炭坑山上の景



『月報』 292 （昭和３年）より

高　松　本　坑　（東水巻駅付近）

鳳炭坑捲揚機台座跡（水巻町吉田東＝平成 19 年消滅）
（明治～昭和初期）

坑内から掘り出した石炭を運搬するトロッコを引っ張るためのロープを運び出す機械を据える煉瓦作りの台座

解体前
長さ7.6× 幅 4.6× 高さ4.3mイギリス積

三菱飯塚炭坑捲揚機台座（飯塚市指定文化財）想像図

主な出土品

二銭貨
明治10年

一銭貨
大正7年

一銭貨
大正8年

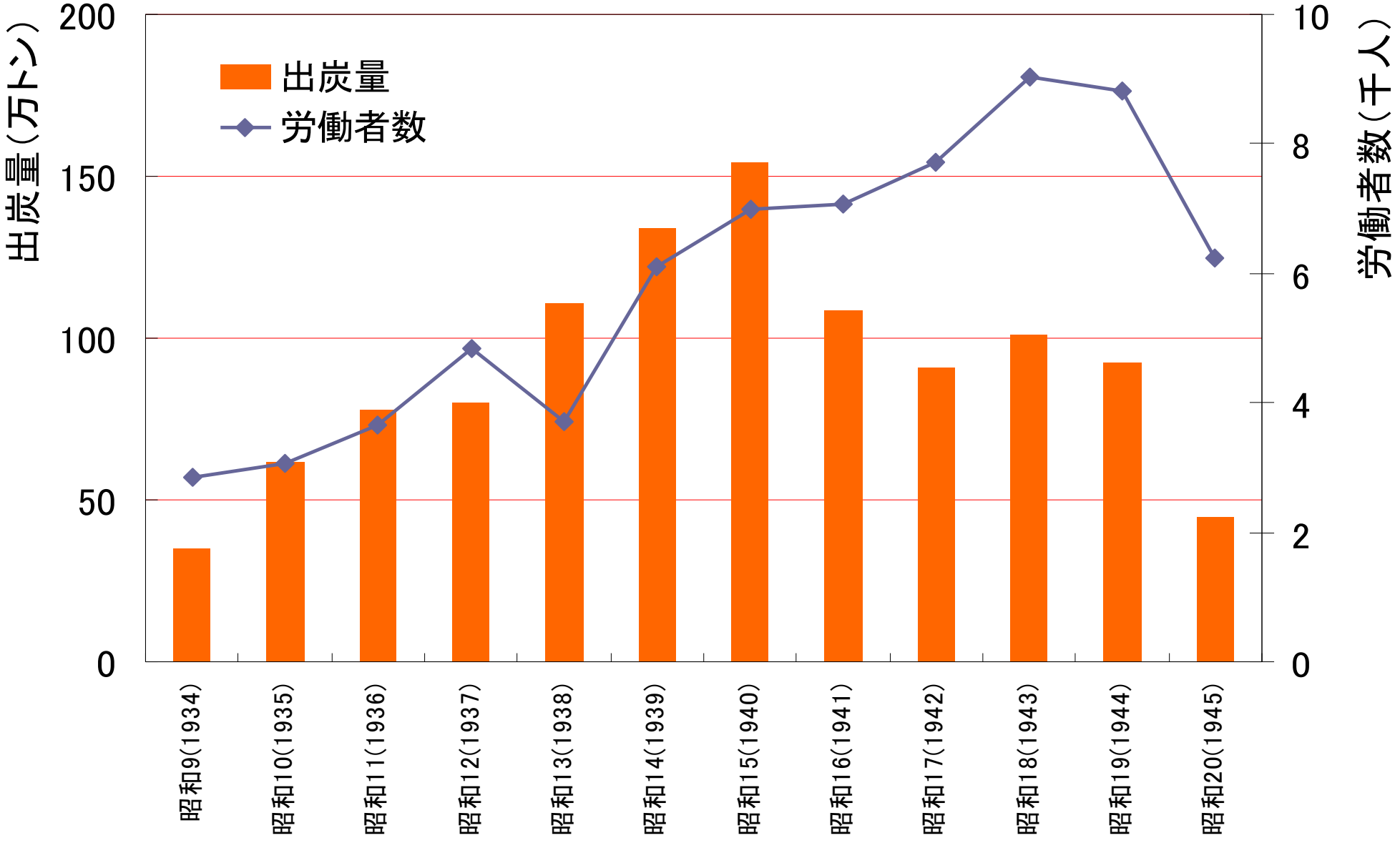
五銭貨
大正11年

遠賀郡水巻町吉田東三丁目所在炭坑捲揚機台座跡周辺推定図
（聞き取りなどを参考とした昭和はじめごろのようす）

3. 戦前の日本炭礦（1934-45）

- 昭和９年（1934）鮎川義介（日本鉱業のちの日本産業）が三好鉱業を買収し日本炭礦㈱が成立
- 炭坑の近代化、電気を動力とする
- 福利厚生施設の充実（２階建て八軒長屋、病院・水道・風呂・配給所など）により労働者増加
- 昭和14年（1939）二島斜坑の開削開始（各坑口をベルトコンベアで結び二島へ集積し洞海湾から船積みする、戦争で中断後昭和23年再開）朝鮮半島からの集団労働移民
- 昭和15年（1940）出炭量年産100万トンを達成、労働力として連合国軍捕虜を受入

日本炭礦時代の出炭量と労働者数（戦前）



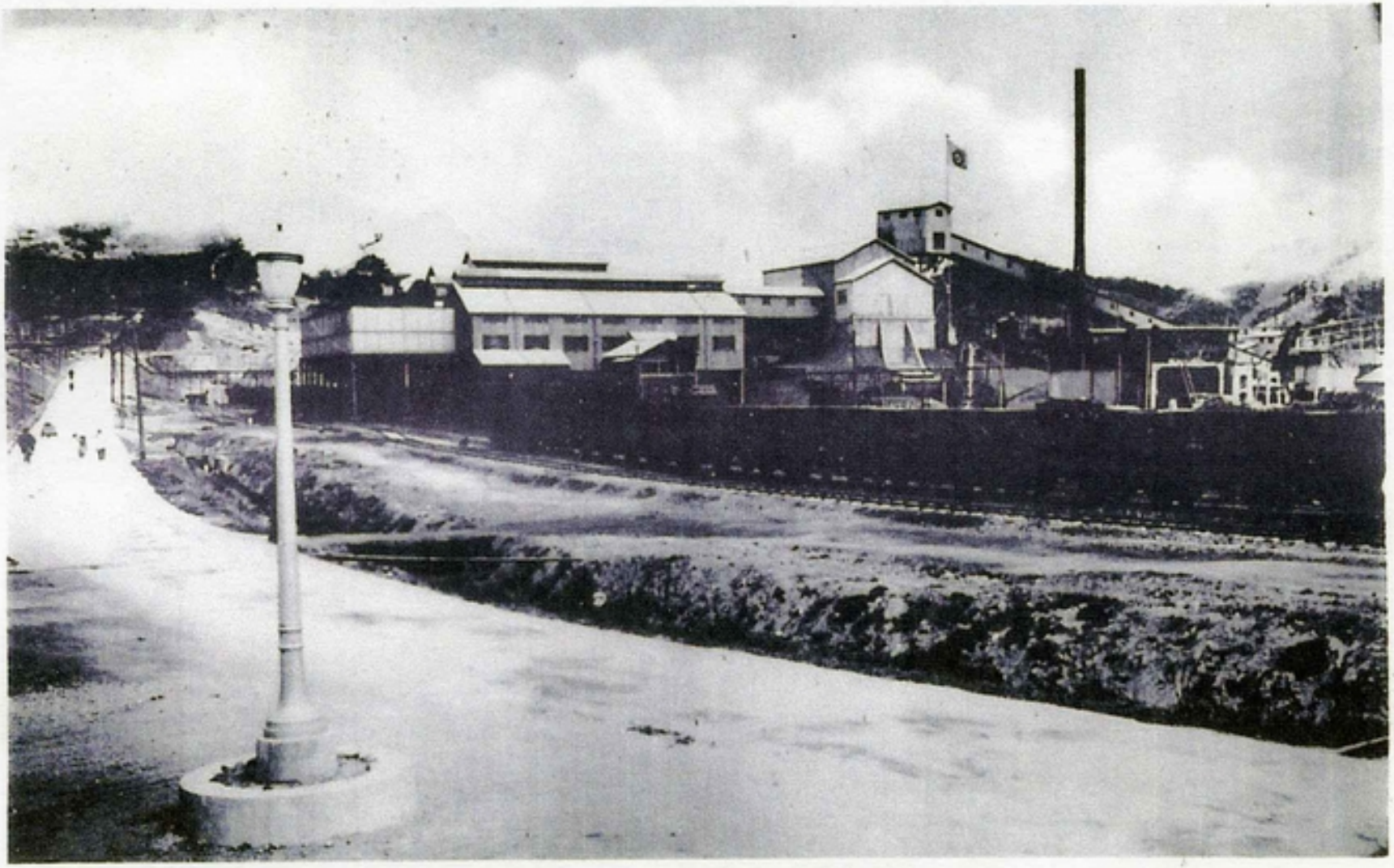
日產化學工業株式會社
遠賀礦業所

第二高松炭礦入坑前の行事ラヂオ体操

下關要塞司令部許可濟
昭和十四年八月四日

大山祇神社（山の神）
現多賀山自然公園

現中央区



第二高松炭礦選炭機

日產化學工業株式會社
遠賀礦業所

下關要塞司令部許可
昭和十四年八月四日

頃末北三丁目付近（総合運動公園周辺）

昭和40～50年代？　　昭和 12 年（1937）建設

旧日本炭礦机クラブ(現頃末北三丁目総合運動公園プール)

木彫レリーフ「二人の青年」
（水巻町指定文化財）

水巻町図書館内に所在。昭和５年（1935）、一色五郎（※）が27歳の時に帝展で入賞した時の作品。日本炭礦の全盛期に建てられた　クラブの玄関に飾られていたもので、水巻の炭鉱の繁栄を象徴するもの。

※一色五郎（1903-85）
茨城県出身。彫刻家。東京美術学校卒業。日展入選11回。

福岡捕虜収容所第６分所

陸軍回復促進班（1945/9）米軍撮影／工藤洋三提供

昭和18年（1943）、日本炭礦では古賀区の炭坑社宅を捕虜収容所に改修し、石炭増産のため連合国軍の外国人捕虜を労働者として1,200人ほど受け入れ、強制労働をさせた。うち70～140名が亡くなったといわれる。

古賀区社宅（現古賀二丁目、梅ノ木団地）
明英寮
（独身寮）
古賀幼児園
光雲寮
（独身寮）
映画館
古賀クラブ
捕虜収容所跡
売店（個人経営）
配給所（会社）
共同風呂
19
21
22
19
20
豆炭工場跡
泥炭池

折尾捕虜収容所のあった場所（水巻町牟田）

軍需生産美術推進隊

昭和18年（1943）太平洋戦争中に全国の炭鉱の生産向上をめざす国家政策の一環として発足。画家や彫刻家で組織され、全国各地の主要炭鉱にシンボル像をつくった。町内にも像や制作時に試作した石膏像が残されている。

一礦産業戦士の像（林是作）

林是（1906-74）東京美術学校（現東京芸大）卒、日本彫刻家協会に参加。行動美術協会彫刻部創立会員。

作者銘
「軍需生産美術推進隊
林是」

一礦坑夫ミニチュア像／石膏／高さ 30cm

一礦広場（S41 消滅）

炭鉱就労者の像　圓鍔勝三作
（水巻町指定文化財）

圓鍔勝三（1905-2003）東京美術学校（現東京芸大）卒、日本芸術員会員。多摩美術大学名誉教授。文化勲章などを受章。

二礦坑夫ミニチュア像 / 石膏 /46cm

作者銘
「軍需生産美術
推進隊　圓鍔勝三」

炭鉱就労者の像　二礦広場

坑夫石膏像(長沼孝三作)

長沼孝三（1908-93）東京美術学校（現東京芸大）卒、帝展に入選。
東京芸術大学名誉教授。

坑夫ミニチュア像 / 石膏 / 高さ20cm

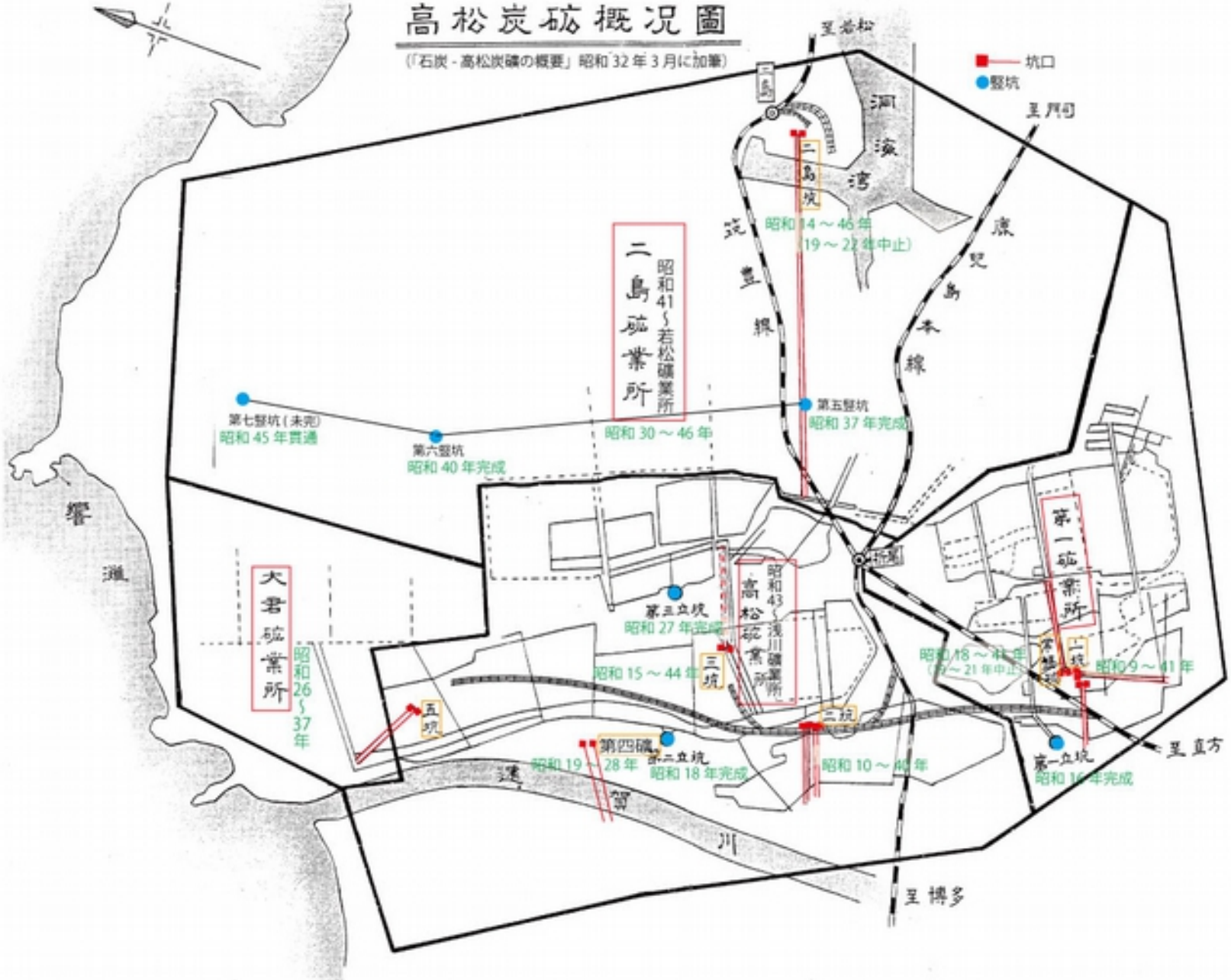
作者銘
「軍需生産美術推進隊　長沼孝三」

4. 戦後の日本炭礦（1946-71）

- 昭和21年（1946）日炭高松労働組合結成
- 昭和23年（1948）従業員は10,000人に
- 昭和26年（1951）カッペ採炭導入
- 昭和27年（1952）カッペ採炭合理化反対スト
  炭鉱文芸誌など文化活動（上野英信・千田梅二・上田博）
- 昭和33年（1958）二島斜坑完成
  石炭から石油への切り替えが進む
- 昭和33～36年（1958～61）会社経営赤字化
- 昭和37年（1962）ビルド鉱として再建
- 昭和39年（1964）折尾東部採掘計画不許可
- 昭和41年（1966）一礦閉山
- 昭和44年（1969）浅川礦（三礦）閉山
- 昭和46年（1971）若松礦閉山

高松炭砿概況圖

（「石炭・高松炭礦の概要」昭和32年3月に加筆）

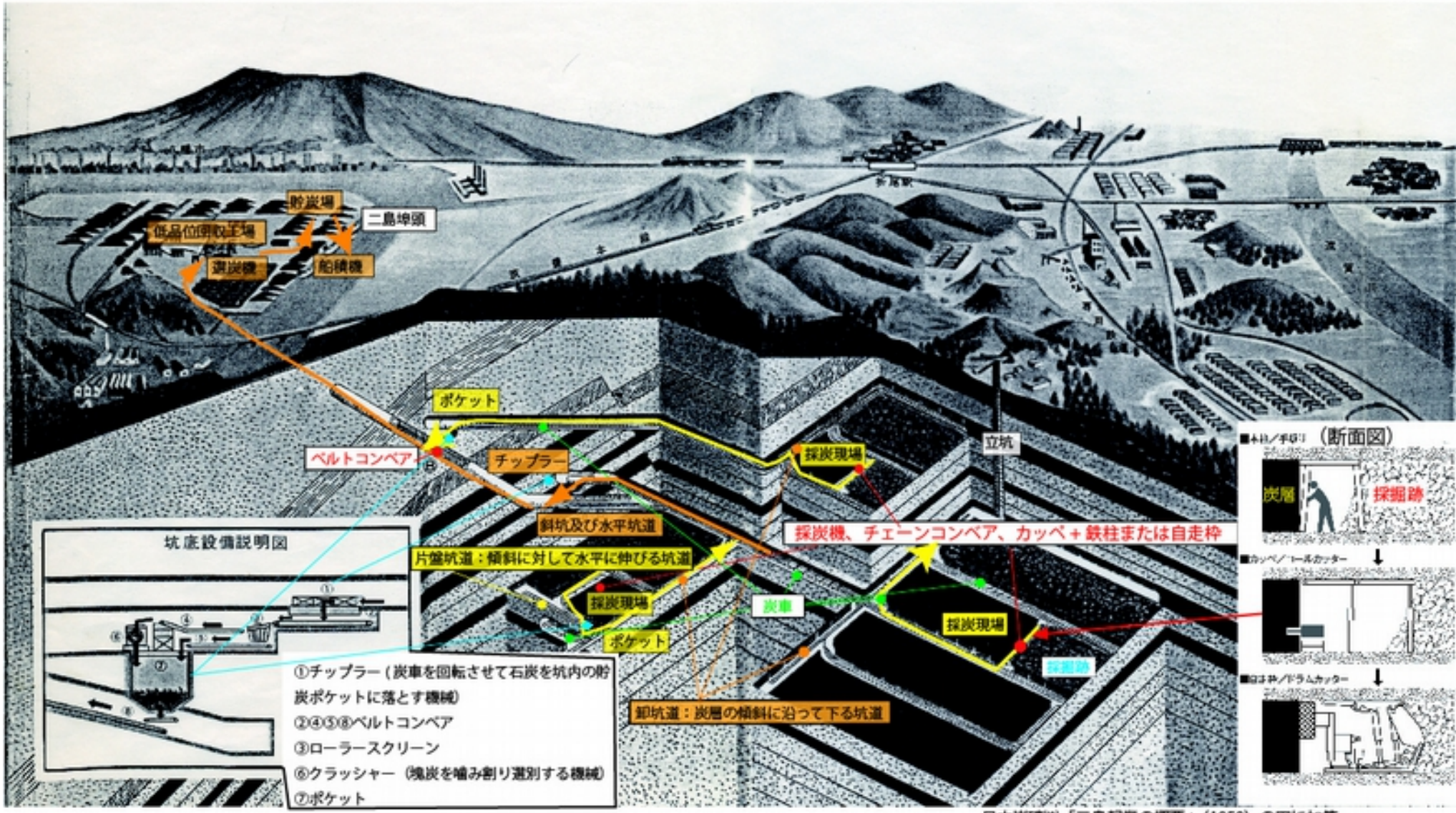


坑内のようす（二島及び高松礦業所とその付近）の模式図

運搬経路（矢印で表示）

採炭現場（チェーンコンベア）→片盤坑道（パンコンベアまたはベルトコンベア）→ポケット（炭車積込）

→卸（捲揚機）→水平坑道（ディーゼル機関車）→チップラー（坑底ポケット）→斜坑（捲揚機、ベルトコンベア）→選炭機→貯炭場→船積

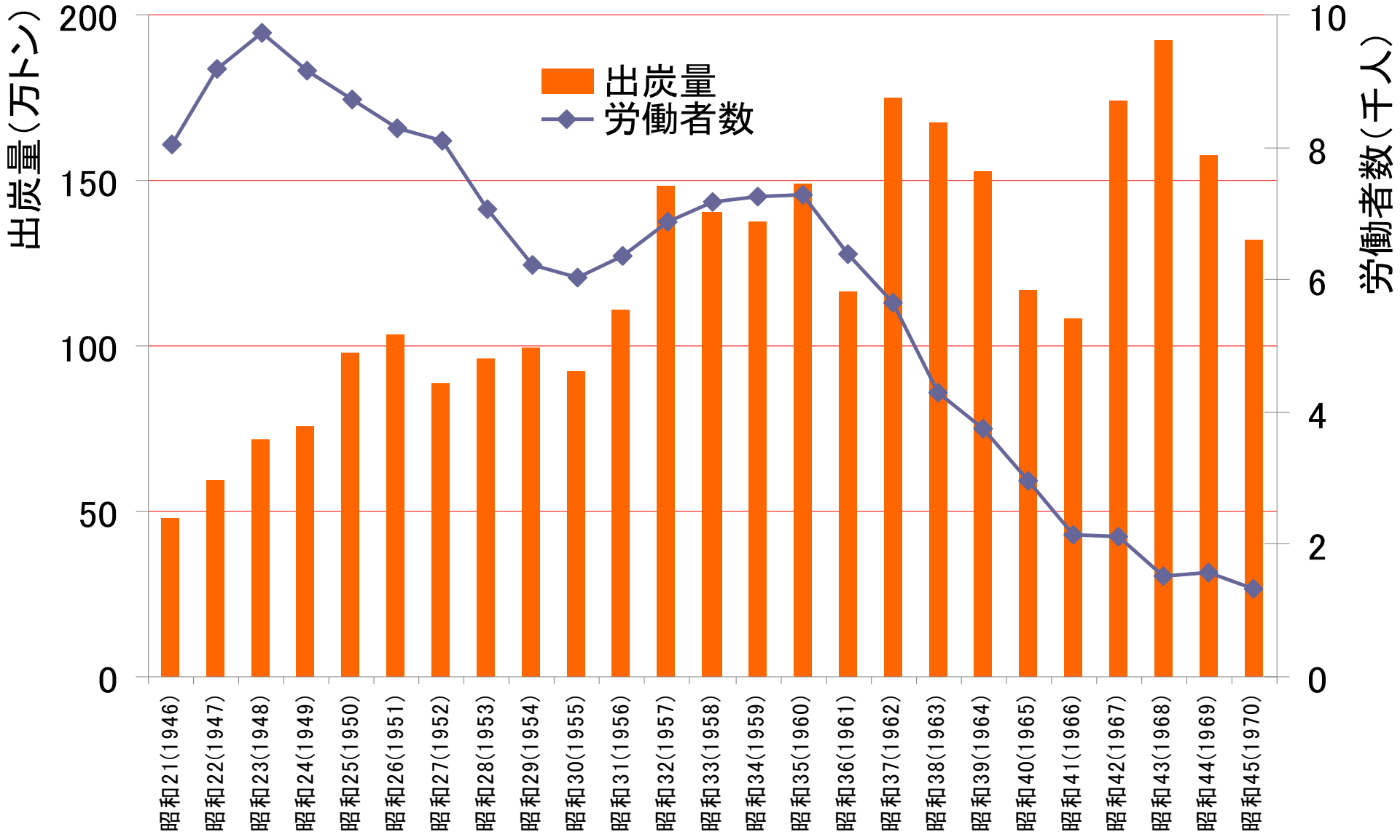


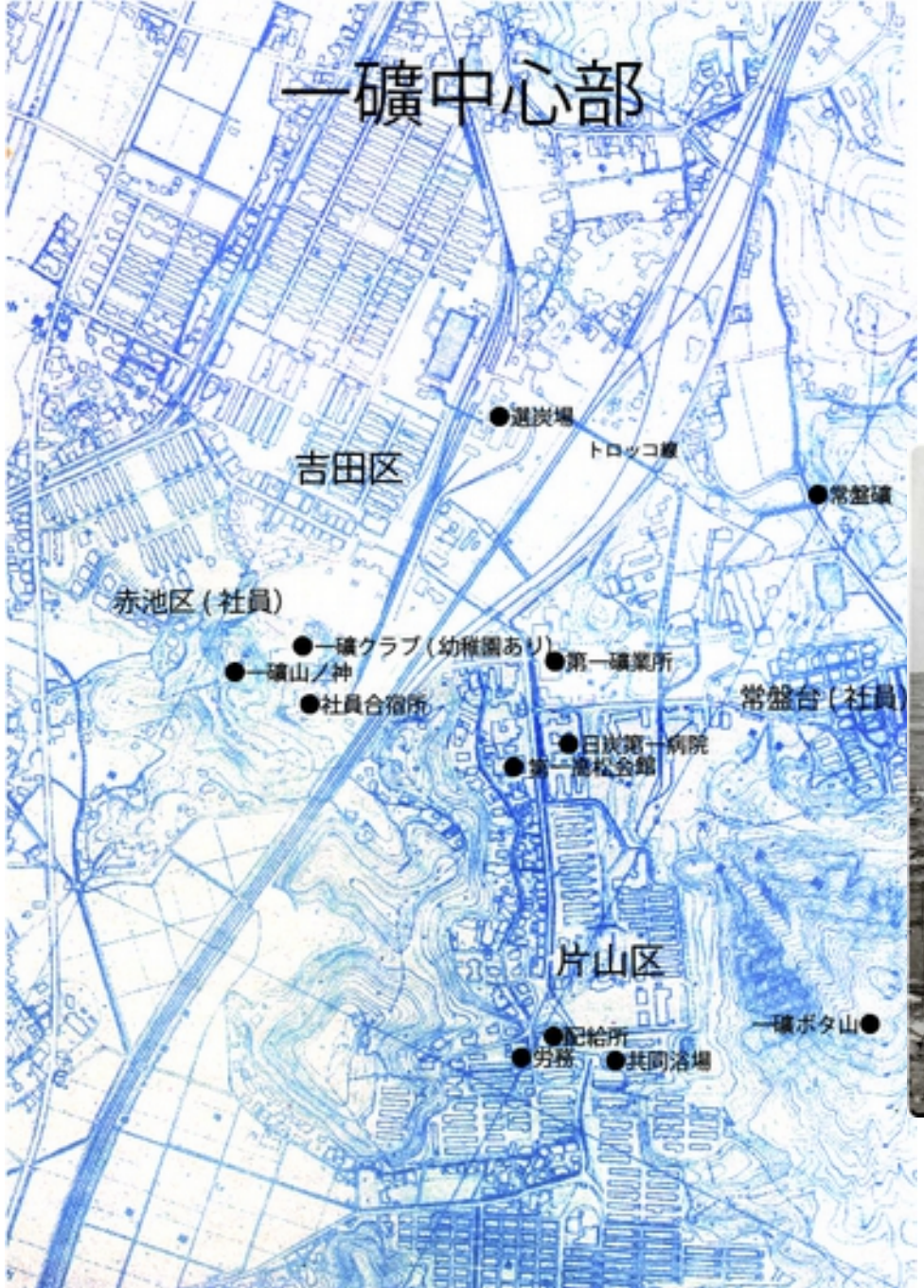
日本炭礦業「二島起業の概要」（1958）の図に加筆

炭鉱技術の変遷

時代	明治（1868～1912）	大正（1912～26）	昭和5（1930）	昭和10（1935）	昭和15（1940）	昭和20（1945）	昭和25（1950）	昭和30（1955）	昭和35（1960）	昭和40（1965）
動力	人力、馬、蒸気	電気								
装備			坑内保安帽（布製）		ヘルメット		キャップランプ	坑内保安靴	一酸化炭素自己救命器	
坑道	木枠、レンガ	レールアーチ	コンクリート			鉄枠				
掘進	ツルハシ					掘進用ローダー（前進しながら掘削した岩石など後方の炭車へ運ぶ）				
		コールピック								
		電動ドリル								
	ダイナマイト					発破器				
		スコップ								
				ロッカーショベル（石炭をトラフに投げ入れる）						
							水力掘進			
採炭	ツルハシ・エブ・カキイタ									
		コールピック								
		コールカッター								
							ホーベル（炭層が薄い場合の採炭）			
						カッペ、鉄柱				
										自走枠
運搬	背負いカゴ・ステ・馬									
	エンドレス捲揚機									
	炭車									
			トロリーロコ							
							バッテリー電車・ディーゼル機関車			
		コンベア		ベルトコンベア						
				チェーンコンベア						
										パンツァコンベア

日本炭礦時代の出炭量と労働者数（戦後）





日炭高松第一礦風景（昭和30年代）

日炭高松第二礦風景（昭和28年）

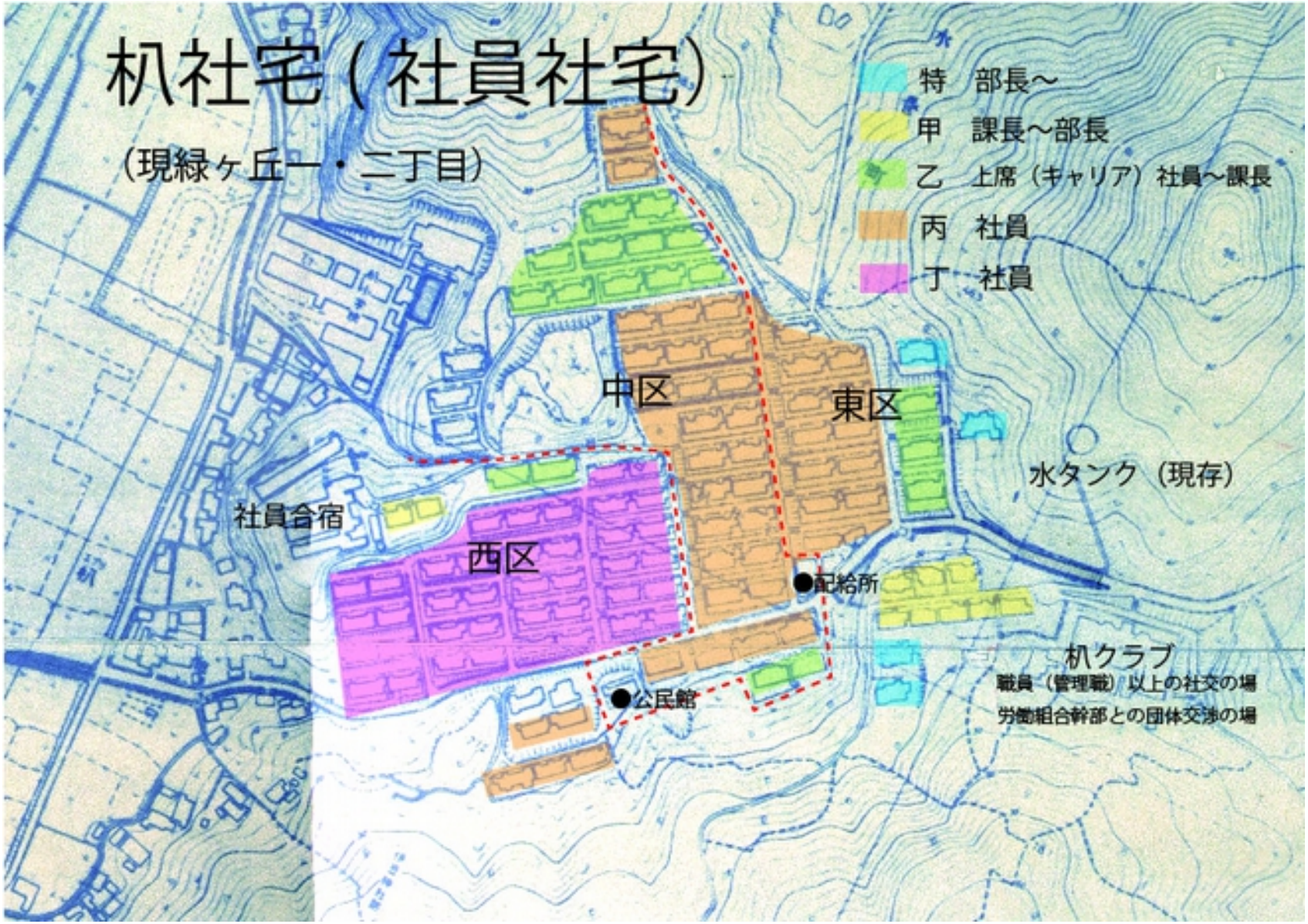
日炭高松労働組合（1946-71）

遠賀地区メーデー
（昭和36年）

- 昭和21年（1946）結成
- 昭和24年（1949）
  日本炭鉱労働組合（炭労）に加入
- 昭和27年（1952）
  カッペ採炭合理化スト（六三スト）
- 昭和34年（1959）
  三井三池争議支援
- 昭和36年（1961）
  100日スト
- 昭和38年（1963）合理化案受入
- 昭和46年（1971）解散

炭鉱の暮らし
炭鉱社宅

- 社員（職員）社宅…役職に応じ社宅の場所や間取りが異なっている、役職者ほど高台に
 丸ノ内・　・宮ノ下・緑野・赤池・紅葉野・常盤台
- 鉱員（炭坑夫）社宅…平屋と二階建ての２･４・６・８軒長屋がある。配給所・共同浴場・共同便所・水道・幼稚園・労務事務所などの施設
 三ツ頭・高松・梅ノ木・古賀・高尾・中央・鯉口・吉田・片山


朽社宅（社員社宅）
（現緑ヶ丘一・二丁目）
特　部長～
甲　課長～部長
乙　上席（キャリア）社員～課長
丙　社員
丁　社員
中区
東区
西区
水タンク（現存）
社員合宿
●配給所
●公民館
朽クラブ
職員（管理職）以上の社交の場
労働組合幹部との団体交渉の場

社員社宅甲号A型
社員社宅甲号B型
社員社宅乙号A型
社員社宅乙号B型
社員社宅丙号A型
社員社宅丙号B型
社員社宅丁号
0
5m

炭坑社宅の間取り図

吉田区社宅（現吉田西四・五丁目、吉田団地付近、中間市岩瀬）

お手を触れないでください

炭鉱の暮らし

洗濯（古賀区）／椎葉磯辰提供

一斉清掃（梅ノ木区）／椎葉磯辰提供

カンガン七厘で炊事

ボタ拾い（一礦ボタ山）／重岡護提供

紙芝居／椎葉磯辰提供

花嫁道中（古賀区）／椎葉磯辰提供

山の神祭典

引込線（梅ノ木区）／椎葉磯辰提供

文化活動

- 昭和 20 ～ 30 年代　「地下戦線」「炭砿長屋」「月刊たかまつ」「文芸誌たかまつ」「サークル村」「蟻塚」など機関紙の刊行
上野英信・千田梅二・上田博他
- 日炭高松写真サークルの活動
庄田明、山崎富士雄、山口勲

炭鉱文芸誌

うえだひろし（1933-2011）

ぼた拾ふ／木版・紙
38.2×30cm/1957 年

レバーブロックを巻く／木版・紙
/18.9×14cm/ 製作年不詳

熊本県生まれ。昭和27〜39年まで日本炭礦（日炭高松炭礦）の第二礦に炭坑夫として勤務。上野や千田とともに炭坑文芸誌の製作に関わり挿図で木版画を担当。以後、水巻町吉田のアトリエにて創作活動を続ける。春陽会会員。77歳で亡くなるまでに「日本板画院展」ほか数多くの美術展に入選作品を残す。